新国立白紙「今になってなぜ」

表題と写真は毎日新聞 7 月 24 日の記事である。リードから―2020 年東京五輪・パラリンピックの主会場となる新国立競技場（東京都新宿区）の建設の伴い、予定地の南側にある都営団地「霞ケ丘アパート」が取り壊される。ここに来て政府が建設計画を一から見直すことになり、転居を迫られる住民からは戸惑いの声が聞かれる。五輪開幕まで 24 日でちょうど 5 年。

「壊す前に何か方法がなかったのかしら」。アパートで 1 人暮らしの柴崎俊子さん（88）は、新国立競技場計画の白紙撤回を複雑な思いで見つめる。アパートは前回 1964 年東京五輪を控えた 60 年、国立競技場周辺の再開発で建設が始まり、10 棟が立ち並んだ。それから半世紀余、国立競技場は建て替えのため解体され、新競技場の敷地は拡大されることになった。これに伴ってアパートは 16 年にも取り壊されることが決まり、跡地は公園となる予定だ。

新国立競技場は計画が見直されても、収容人数を従来の 5 万 4000 人から、五輪会場に必要とされる 8 万人に増やす方針は維持される見通し。周囲に「人だまり」のスペースが必要になるため、アパート取り壊しの計画は変わっていない。新国立競技場の従来計画のデザイン募集が始まった 12 年夏、住民に移転の話が伝えられた。その頃は約 230 世帯が暮らしていたが、今は約 135 世帯。6 割程度が高齢者だ。「環境が変わることは、年寄りにとって本当にマイナス」と柴崎さんはこぼす。近くの別の都営住宅への入居を希望するが、間取りは 3DK から 1DK になる。高齢のため利用している介護ベッドを新居に置いたら、部屋がいっぱいになる。

現在もアパート取り壊しに反対する声はあるが、地元町会長の井上準一さん（69）は「希望を持って元気で移転しようと思っている」と言い切る。それでも一連の騒動で、競技場の足元で暮らしてきた住民の感情がかき乱されるのではないかと懸念する。「（競技場が）小さくなるんだったら、動かなくていいんじゃないかって思う人も出てくる。今になって何でという気持ちはありますよ」

数年前に霞ヶ丘アパートを訪ねたことがある。歴史と生活を感じさせる団地であり、柴崎さんの言葉が重く心に迫る。

（2015 年 8 月 1 日）